

令和3年度 内灘町子ども読書感想文 コンクール作品集



発行 内灘町学びの風推進協議会
内灘町教育委員会



令和三年度 内灘町子ども読書感想文コンクール 作品集

《目次》

【小学生の部】

みずをくむプリンスをよんで	大根布小学校一年	高山 瑚子	1
「どこからきたの？おべんとう」をよんで	白帆台小学校一年	清野 恵美里	2
キンと能里	向粟崎小学校二年	米田 光	4
「はしごしゃののびるくん」をよんで	白帆台小学校二年	山田 陽翔	5
やさしいメロスと親友	向粟崎小学校三年	中谷 芽衣	7
おにぼうを読んで	鶴ヶ丘小学校三年	谷場 奏風	9
ふしぎなだかしや	向粟崎小学校四年	夷藤 彩音	11
いなかぐらしの2人	清湖小学校四年	吉田 昊矢	13
努力について教えられる本	清湖小学校五年	山田 咲幸	15
世界で最初にズボンをはいた女の子	白帆台小学校五年	横山 来未	17
グッドラックを読んで	向粟崎小学校六年	犬原 嘉乃	19
東日本大震災警察官救護記録「あなたへ。」を読んで	大根布小学校六年	菊井 琴美	21

【中学生の部】

孤独であること	内灘中学校二年	吉田 紗久	23
大人から見た子供、子供から見た大人	内灘中学校二年	森 響生	27
考び、繋ぐ	内灘中学校三年	橋本 瀬七	30
人間性も野球も”日本一”	内灘中学校三年	南 梓彩	33
令和三年度 内灘町子ども読書感想文コンクール 入賞作品一覧			36
編集後記			42



みずをくむプリンセスをよんで

大根布小学校 一年 たかやま ここ

わたしは、たくさんのほんのなかから「みずをくむプリンセス」をえらびました。そのりゆうは、プリンセスがどんなにかきになったからです。わたしが、これまでよんだほんでしているプリンセスは、ドレスをきておしろにすんでいるおんなのこです。みずをくむプリンセスってどんなかなとおもってよんでみることにしました。

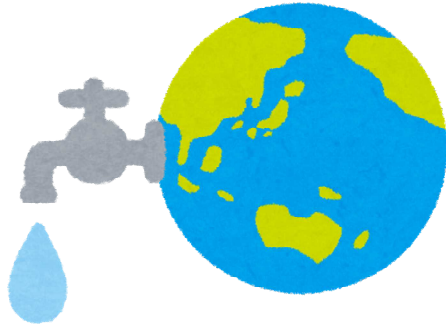
よんでみると、アフリカにすむジージーというおんなのこが、おかあさんとみずをくみにいくおはなしでした。ジージーのすむばしょは、そらがひろくてほしがたくさんみえるばしょです。でも、おうちには、みずがありません。ジージーはあさ

はやくおきておかあさんとみずをくみにいきます。あたまにみずをいれるつぼをのせて、とてもおいばしょまでいきます。

わたしは、みずがないというせいかつをしりません。のどがかわけば、すぐにみずがのめます。くろうをしてみずをのんでいるジージーはたいへんだなとおもいました。けど、いきるためにいっしょうけんめいみずをくむジージーはかっこいいとおもいます。わたしだったら、こんなにたいへんなことをまいにちつづけられません。がんばりやさんのジージーはすごいです。わたしとしているプリンセスとはぜんぜんちがいました。これまでしっていたかわいいドレスのプリンセスとはちがうけど、がんばりやさんのプリンセスもすてきだなとおもいました。わたしも、ジージーのようになんばっていききたいです。

このほんをよむまで、みずがないいえのせいか

つがあるとしりませんでした。せんせいにきいてみると、せかいにはそんなにたくさんあると聞いていました。とてもびっくりしました。いまは、あたりまえのようにみずをわかっているけれど、これからはもっとたいせつにわかっていこうとおもいます。みずをだしっぱなしにしないことなど、じぶんにできることをやっていきたいです。



「どこからきたの？おべんとう」をよんで

白帆台小学校 一年 清野 恵美里

このほんは、おかあさんがわけてくれました。おべんとうのえが、かわいくわいてあったので、すぐによみたくなりました。

このほんには、おべんとうのなかが、どこからきて、どうやってたべられるようになるのか、が、かかれていました。

わたしが、いちばんすきなおかずのポテトサラダのことが、わいてありました。ポテトサラダにはいつているじゃがいもは、ひろいはたけからのうかのひとがあつめて、かわかして、はこにつめたら、トラックではこぶひとがいちばやスーパーにはこぶそうです。それから、スーパーでふくろ

にいらてくれるひとがいて、そのじゃがいもをおかあさんがかってきてりょうりをしてくれて、やとポテトサラダがかんせいします。わたしは、のうかさんは、なつはあついだろうなとおもいました。トラックではこぶひとは、おもくてたいへんだろうなとおもいました。ふくろにいらるひとは、きれいにいらてくれてすごいなとおもいました。

ほかに、おにぎりやアジフライやミニトマトやたくあんやバナナ、ブロッコリーやコーンなどのこともかいてありました。アジフライのおさかなは、りょうしさんがふねにのつてうみでとつてくれるそうです。たくあんは、わたしのおばあちゃんもつくつてくれます。おばあちゃんがそだてただいこんをつかつてつくるので、おいしいです。おにぎりのおこめやミニトマトやブロッコリーは、そだててくれるのうかさんがいます。それをはこ

んでくれるひと、スーパーでうつてくれるひと、りょうりをしてくれるひと、スーパーでうつてくれるひと、りょうりをしてくれるひと、たくさんひとのおかげで、いつもごはんをたべられるんだなとわかりました。

このほんをよんで、たべものはたくさんひとが、がんばつてつくつてくれたものだから、たいせつにしようとおもいました。まいにちのこさずにとわすれずにいいたいです。



野生のトキを保護して人工飼育をしたトキを野

生にはなす仕事をしている人たちの様子を知って、僕も佐渡トキ保護センターに行って働きたい気持ちになりました。獣医さんが飼育ケージを掃除し

ていると、キンが甘えてきているところが、まるで「ねえ、なでなでして!」と言っているように

かわいくて、鳥も人間と同じで、しぐさで何をしているとか、どんなことを思っているのかということが、なんとなく分かるんだなあと思いました。

人間が森林伐採したり、羽根を売るために捕獲

したり、農薬汚染でフ化できずにトキが少なくな
ったことがわかって悲しくなり、ハンターたちは
鳥や動物たちのことを考えてないなと思いました。
でもキンを守るために、毎日観察して手からドジ
ヨウをあげていた人もいて、キンはその人を信頼
できる人だと思っていたのだろうと思いました。
そんな、日本で最後の野生のキンが捕獲されトキ

保護センターに行ったのをお母さんは可哀想だね
と言いましたが、僕はそうは思いません。キンは
三十年以上長生きしたし、センターでくらしたた
くさんのデータが中国でのトキ飼育に役立ってい
るのがうれしいと思ったからです。

いつか僕たちの住んでいるところに、きれいな
鴉色の羽根を広げて飛んでいるトキを見ることが
できたら、僕はうれしくて泣いてしまうだろうと
思います。



「はしごしゃののびるくん」を読んで

白帆台小学校 二年 山田 陽翔

ぼくは、はたらく車がすきです。はしご車のえ
を見たとき読んでみたいと思い、「はしごしゃの
のびるくん」を読むことにしました。

「はしごしゃののびるくん」には、はしご車の
のびるくんと、そのなかまのはたらく車たちが出
てきます。じけんやじごがおきたばしょに行って、
人をたすけるお話です。

この本でここにのこったところは、ぜんぜん
のびるくんの出ばんがなくて、力がでなくなり、
はしごがうごかなくなったけど、またはしごをう
ごかして人をたすけられたところです。出ばんの

多いしょうぼう車やポンプ車ではたすけられず、のびるくんにしかたすけることのできないげんばでした。のびるくんの出ばんがなくて、元気がないとき、ぼくは、かわいそうだと思いました。でも、のびるくんのなかまたちが「のびるくんにかできないことがあるんだよ。」とはげますぶぶんを読んで、うれしくなり、ぼくも「がんばれ」とおうえんしました。

ぼくも友だちにはげまされて、うれしかったことがあります。それは、さかあがりがなかなかできなかったときです。れんしゅうしてもうまくできず、あきらめそうになりました。そんなとき、友だちがおしえてくれたり、「あとすこし」とこえをかけたりにくれました。そのおかげで、あきらめずにれんしゅうをつづけることができ、さかあがりをすることができました。

この本を読みおわって、一人ではできなくても、

なかまときょうりよくすればできることもあるということがわかりました。ぼくもこれからできないことがあったとき、あきらめずに友だちとたすけあっていこうと思います。はげましながら、いろいろなことにチャレンジしたいです。



やさしいメロスと親友

向栗崎小学校 三年 中谷 めい

何でメロスは親友のためにいのちをかけて走ったのかな？、とわたしは思いました。

わたしははじめ、スポーツの大会でメロスがさい後にかつお話だと思って、この本をえらびました。でも読み終わった時、自分の身代わりになった親友を助けるために、いのちをかけて走るお話だと分かりました。

わたしがメロスなら、王様は自分より上の立場だし、きけんな目にいたくないので、おこっていても、王様の所には行かず、帰ります。だけどメロスは多ぜいの人をころした王様がゆるせず、おしろに行って王様につかまってしまいました。

そんな事しなければいいのに。

メロスは、妹のけっこん式だけは出たいと、親友を身代わりにしました。その事を親友に話した時、メロスを信じて、だまってうなづいておくり出してくれました。

わたしが親友の立場だったら、メロスを信じられないと思います。なぜなら、もしメロスが帰ってこなかったらころされてしまうからです。

それでもメロスを信じてくれた親友は本当にすごい人です。

親友のために、いのちをかけて走ったメロスでも、「もうどうでもいい。」と、あきらめそうになった時もありました。だけど、歩けるというわずかなきぼうだけで、メロスはさい後まで走りました。

わたしもマラソン大会で、はじめはまけていたけど、おうえんの声を聞いて、さい後まで走りき

る事が出来ました。とてもくるしかったけど走ってよかったです。

メロスはきつともっとくるしかったんだろうと思います。でもおしろまで走って本当によかったとメロスも感じたと思います。

あきらめずに走るのはつらいけど、さい後は、うれしいと思うからです。

走ってやくそくをまもったメロスを見て、人を信じた事がない王様が、メロスと親友のおかげで、人を信じる事が出来ました。

わたしは、王様にころされるかもしれないというきょうふの中、メロスの事を信じて、まっすぐに走ってきた親友、さい後まで、あきらめずに走りきったメロスの二人とも、とても心やさしい人だと思います。

わたしがこの本を読んで、メロスや親友のように出来るかな、と考えました。いのちをかける事

は出来ないけど、学校生活や家でも、自分の事だけを考えるのではなく、友だちや家族、ほかの人の事も考えて、メロスや親友のように、思いやりの心で、行動していける人になりたいです。そしてこの考えを、まわりの人たちにも伝えていきたいなと思います。

さい後に、わたしは、この夏休みに「走れメロス」を読んで親友の大切さとあきらめずに走ることを学んだので本当によかったです。



おにぼうを読んで

鶴ヶ丘小学校 三年 谷場 奏風

おには、悪者とだれが決めたのか、ぼくはおにぼうを読んで、何が正しくて何が悪いのか考えました。

山の中でしずかにくらしていた母おにとおにぼう。ある日、人間のうった鉄ぼう玉にあたり母おには死んでしまいます。さいごに、「人間をうらんではいけないよ。きつとまちがえてうったのさ。母ちゃんは人間となかよくしたかった。もし人間に会ったら、らんぼうしちやいけない。やさしくするんだよ。そうすれば、人間となかよくできる日がくるはず。」と母おには言いのこしました。その言いつけをまもって、おにぼうは村の子ども

たちとなかよくなり、遊ぶようになります。でも大人たちは、おには人間を食べるからと、子どもたちとおにぼうを引きはなしました。村にこう水がおこったときに、大人たちはおにぼうの力を用いて、母おにのおはかの大岩をがけの下の土手に運ぶようにたのみに行きます。さいしょ、大人たちにたのまれたおにぼうは、まよいます。でも母おにのさいごの言葉を思い出します。「なかよく。村の人たちとなかよくなれるなら、母ちゃんもよろこんでくれるだろうか。でもあの岩には母ちゃんが。」しばらく考えたおにぼうは、村の子どもたち、友だちのために岩を動かす決心をして、大岩を動かしました。しかし、さいごのさいごにがけがくずれて、おにぼうは大岩といっしょに川に落ちて死んでしまうのです。おにぼうと大岩のおかげで、川の水があふれることがなくなったけれど、おにぼうを助けなかった大人たちに子ども

たちは、「おにならうなってもええのか。死んでもええのか。父さんたちこそおにじゃないか。」

となみだをながしながら言いました。それから、村にはどんなに大雨がふつても、大岩のおかげで水があふれることがありませんでした。村人たちは、きつとおにぼうのおかげだと、大岩に手をあわせるようになりました。

ぼくは、大人たちがおにはこわいし悪者と決めつけて、おにぼうとちゃんと話をしないでいることにはらが立ちました。子どもたちは、自分の目でおにぼうを見て、ちゃんと話をしてやさしいおにぼうがすきになり、友だちになりました。ぼくもサッカーを習いはじめたとき、はじめて会う人やコーチがこわい人かなと思っていました。でもいっしょにプレイして話してみても少しづつなかよくなることができました。ぼくも決めつけてはんだんすることは、よくないしやめようと思いました。

た。そしておにぼうは、母おにの言葉の人間とかよくするということを、ひどいことをされたのに、さいごまでまもったことがすごいと思いました。ぼくだったら人にうらぎられたら、人間を助けることができないと思います。おにぼうを読んではぼくは、見た目やうわさで決ついたりせず、おにぼうのようにこまっている人がいたら助けることが出来るやさしい心をもった人になりたいなと思いました。



ふしぎな다가しや

向栗崎小学校 四年 夷藤 彩音

私がこの本を選んだ理由は銭天堂シリーズが好きて何巻か借りて読んだ事があって、まだ読んだ事がなかったので選びました。

一冊の中に六つのふしぎ駄菓子についてのお話があつてどれもおもしろいけれど、とくに好きだったのは、

「田舎もなか」です。

お話の中の紗耶ちゃんは東京に住んでいて、どちらのおじいちゃんおばあちゃんも東京に住んでいるのに、田舎に行くお友達をうらやましく思っていました。石川県に住んでいる私からしたら、

東京の紗耶ちゃんの方がテーマパークや遊んだり楽しめる場所が石川県よりたくさんあるのに、田舎がいいと思うなんて、私と正反対だなと思いました。

私のおじいちゃんおばあちゃんはどちらも田舎だけれど父方のおじいちゃんおばあちゃんは歩いて五分くらいの所に住んでいます。

すぐに会えて、ママの用事があつてもあずかってもらえたり、畑で育てた野菜を分けてもらうなど、たすけてもらっています。

毎日のように会えるので会うことに特別な感じはしないけれど、毎回会うたびにおじいちゃんおばあちゃんはとてもうれしそうによろこんでくれます。

また、母方のおじいちゃんおばあちゃんは車でのと里山海道を通って一時間半くらいの所に住んでいます。

おじいちゃんおばあちゃんになかなか会えないけど、ひさしぶりに会うとうれしいです。他にもさしみが食べられたりいところに会えるのも楽しみの一つです。

だからこそ、会いに行けなくなると泣くほど悲しくなります。なので、物語の中で紗耶ちゃんがおじいちゃんおばあちゃんとはなれたくないという場面がありましたが、私もその気持ちがよくわかるなと思いました。

もし他に銭天堂でおかしを売るとしたら、私は「聞いてヨーグルト」

というおかしを作りたいです。

どんなおかしかというとなんでも聞いてくれるおかしです。言うだけでなんでもしてくれます。

どうしてそのおかしを考えたかという、かなえたいことを言うだけで実げんできるおかしがほしかったからです。

私なら自分が食べてコロナウイルスのワクチンが完ぺきになってほしいと願います。

そして、コロナで苦しむ人がいなくなって世界が平和になってほしいです。世界が平和になったら、もう一度家族でデイズニーランドとデイズニーシーに行ってスプラッシュマウンテンに乗ってみたいです。



いなかぐらしの2人

清湖小学校 四年 よし田 こう矢

どうしてこの本を選んだかというと、お母さんといっしょに図書館にいったおかあさんが見つめました。物語が長そうで題名がなんとなくおもしろそうだったのでこの本を選びました。

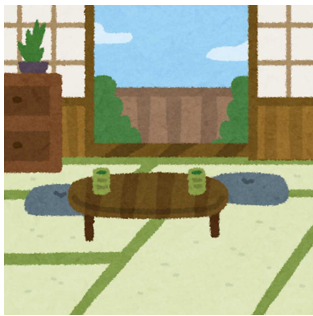
パパは転きん、ママはしょうしんが決まり、いなかにいるおばあちゃんと二人でくらすことになった翔。そのせいで転校もしなきゃいけないし、いなかぐらしもどうすればいいか分からなくてとまどう毎日。しかもパパもママも、おばあちゃんも、みんなやりたいようにやってくる。大人たちの都合によりこれからもたいへんな毎日がつづく。というお話です。

ぼくが心にのこったところは2つあります。

一つ目は、「パパもママも、おばあちゃんできえ、自分のやりたいようにやってきた。これからもそうだ。なんでいつも、ぼくにだけ、そのシワ寄せが来るのさ。悔しくて、悔しくて、テーブルにつつぶして泣いた。あとからあとから、面白いように涙があふれ出た。」のところ。主人公の気持ちになるとかわいそうでお母さん、お父さん、おばあちゃんのことを自分のことしか考えてない悪まに見えてしまいます。仕事とのことはしやうがないと分かっているのに。ぼくだったらテーブルにつつぶして泣いたあと、悔しくて悔しくて、悔しすぎて部屋のすみにたいいくずわりでだまりこんでかってにおちこむと思います。

二つ目は、「ママがため息をついて、つぶやいた。『長いこと苦勞した末に、やっと気まなひと暮らしをしているおばあちゃんよ。翔ちゃん

の世話をお願いするだけでももうしわけのないのに、犬なんて……」『犬はぼくが世話するもん。ちゃんとするもん。約束する。』『子どもは無責任に、そういうことをいうの。おもちゃじゃないんだから。一日たりとも世話はサボれないのよ。赤ちゃんと同じなのよ。雨が降ろうがヤリが降ろうが、散歩だって行かなくちゃならないし。翔ちゃんにできるはずがないでしょう。勉強だってしないでくせに。』のところです。ここもやっぱり主人公の気もちになるとかわいそうだと思いました。犬の世話がサボらずちゃんとできるかどうかはやってからじゃないと分かんないのにできないと決めつけられているからです。ぼくだったら「かつてに決めつけないで。」と言いつけ返すと思います。この本を読んで、家族全員でいっしょにくらすとい



うことはとても幸せなことだということが分かりました。家族全員でくらすせない翔はともかわいそうだと思います。



努力について教えられる本

清湖小学校 五年 山田 咲幸

わたしが『りんごのおじさん』の本をえらんだ理由は、二つあります。一つ目は、題名の「りんごのおじさん」とは、どのような意味なのか、なぜこのような題名なのか気になったからです。二つ目は、表紙がおじさんとおじさんよりも大きな真っ赤でおいしそうなりんごがならんでいたの少しおどろいたからです。

この本のあらすじは、りんごを作っている農家のおじさんがおいしいりんごを作るためにいろいろな工夫を重ねていきます。そして、とうとうお

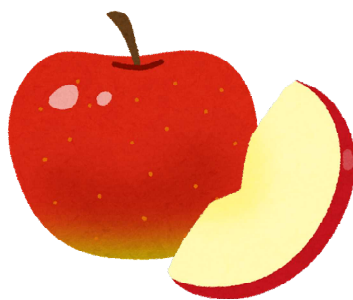
じさんがしていた育て方で、たりない所を見つけ、りんごの木を無農薬で自然にふれさせておいしくてきれいなりんごを作ることができたという話です。

わたしが心に残った所は、二つあります。一つ目は、あるときおじさんが、くすりもひりょうもつかわずに、自然のままそだてるというやり方で、おいしいお米を作っている人のかいた本を読んで、「そうか、お米ができるなら、りんごだって、できるかもしれない」と言って、おじさんはおもいきってくすりやひりょうをつかうのをやめました。と、いう場面です。なぜなら、何年もつづけてきたやり方をおもいきってかえるということとはとても勇気のいることだと思うから、すごいなと思って、感動しました。二つ目は、おじさんがくすり

にもひりょうにもたよらずに、じぶんのちからはなをさかせ、じぶんのちからでみのったりんごをようやくひとくちかじって、ぎゅっとめをつぶって「うまいっ」と言ったところです。なぜなら、何年もしっぱいして、やっとできたりんごをかじったときの、ぎゅっと目をつぶった顔や、ようやくできた「うまいっ」の言葉がとてもおじさんのとてもとてもうれしいという気持ちが伝わってきました。そこでわたしは、おじさんはとてもがんばっていたので、おいしいりんごができて本当によかったなと思いました。

わたしは、この本から、ど力する大切さを教えられました。一つの問題に対して、色々な方法のためしたり、工夫する大切さ、またそれにより起こるいいこと・わるいことも考える必要さも大事

だと感じました。そして、何よりこの本を読むまえのわたしだったら、もしつらいことやこまったことがあったら、ど力をして、と中であきらめてしまっていたかもしれないことでも、今のわたしはおじさんのように、たとえしっぱいしてしまっても、あきらめずにど力をして、そのかべをのりこえようと思います。



世界で最初にズボンをはいた女の子

白帆台小学校 五年 横山 来未

この本を選んだ理由は、表紙の絵で女の子がズボンをはいているだけで周りの人がおこっている顔やおどろいている顔なので不思議に思ったからです。

少し昔、女の子はズボンをはいてはいけませんでした。メアリーは、ズボンの方がドレスより心や体が楽になると思い、ズボンをはきました。わたしも着物を着た時、重くて上手に歩けませんでした。着物をぬいだ時は楽になりました。メアリーもズボンをはいた時、わたしと同じように心も

体も「スツキリ」したと思います。町の人達は、だれも「いいね」と言ってくれませんでした。それでも、次の日もズボンをはき学校に行きました。すると、ズボンをはいていた女の子もいました。それからメアリーは、おばあちゃんになって亡くなるまでズボンをはき続けました。

町の人達は、女の子がズボンをはくのを強く反対していたけど、クラスの女の子達は、メアリーがズボンをはいているのを見てまねをしてズボンをはいていたのでおどろきました。

クラスの女の子達の気持ちが変わったのは、メアリーが町の人から強い反対にあってもズボンをはき続けたからだと思います。本当は、メアリー以外の子達もズボンをはきたかったけれど、周りの人から何か言われそうではなかったのだと思

います。メアリーが、ズボンを女の子もはいていいと思ってはき続けたのを見て、自信がつき、クラスの子達もズボンをはいたのだと思いました。わたしだったら、たった一人でズボンをはけないと思います。わけは、一人だとだと仲間もないし、はずかしいからです。だからメアリーはとてもすごいと思います。

メアリーがズボンをはき続けられたのは二つの助けがあったからだと思います、二つ目の助けになったのはお父さんです。メアリーがやっぱりズボンではなくドレスを着た方がいいのか迷っていた時、お父さんは、「はきたいならはき続けなさい。」と言ってはげましてくれました。だから次の日もズボンをはいて登校できたのだと思います。二つ目の助けはクラスの女の子達です。メアリー

がズボンをはいて学校に行くとクラスの女の子もズボンをはいていたからです。メアリーはお父さんやクラスの女の子達の助けによってズボンをはき続ける事ができました。

この本を読む前は、だれかがやっていたから行動することが多かったです。自分の考えを持つ事と、それを行動に移す事が大切だと分かりました。助けがあると成功しやすい事も分かりました。

周りの人達の助けも必要という事が分かったので、自分から助けを求める事や、周りの人達が努力していたら助けてあげたいと思います。



グッドラックを読んで

向栗崎小学校 六年 犬原 嘉乃

「幸運が訪れないからには、訪れないだけの理由がある。幸運をつかむためには、自ら下ごしらえをする必要がある」

この言葉は私の足りないものを教えてくれているようでした。私に足りないもの、それはたくさんあるけれど、それらすべてこの一つにつながっていると思います。

私は時々テレビやYouTubeで、天才ピアノ少年！や、〇〇大会最年少優勝！などを見ることがあります。そこで画面にうつっているのは、年の近い人や、私よりも年下の人たちです。ピアノ少年の演奏を動画で見ってみました。とてもすてき

で、感情のこもった演奏でした。どうしてこんなにいい演奏ができるのか、やはり天才だからだろうか、そんなことをモヤモヤと考えていました。それに比べて私は、話すのも上手じゃないし、得意で、みんなに見せられる程ピアノも上手ではありません。

私もピアノが上手に弾けるような才能がほしかった、私は運がないな、と思っていました。

けれど、この本を読んで、気付かされました。最初からなんでもできる人なんていない、これが自分なんだ、これこそ自分の個性なんだというのができるまで、下ごしらえ、つまり、努力があるんだと気付きました。

幸せをつかむその裏には、たくさんの努力があります。それは才能よりも確実に、とても大きな力になると分かりました。

読み終わった後、オリंपピックを見ていました。

体操の内村選手が出ていました。鉄ぼうから落ちていました。落ちたのかーとなんとなく見ていると、内村選手が言いました。

「やっぱり鉄ぼうは楽しいです。」

楽しい、やっていて気分がいい、ワクワクする？楽しい、楽しいから、失敗しても続けられる？楽しいから、努力し続けることができるんだと、分かりました。

〇〇のため、〇〇が言ったから、ではなく自分がしたいから、自分はこれをしていて幸せだから、これをする、これができるように努力をするというのが、幸運をつかむための下ごしらえなのではないかと思います。

私は、ピアノが好きです。大好きです。確かに、人前で弾く時、緊張するので、そこまでの演奏とは言えないかもしれないけれど、それでも今まで約8年間、続けてきました。ピアノが大好きだ

からです。そして、これからも弾き続けたいと思っています。なかなか上手いかわなくて、ピアノをやめたいと思ったこともありましたが、でも、そんな時に

「もうちょっと、続けてみない？お母さんも一緒に聞くから。」

と、母が支えてくれることもありました。この母の支えがなかったら、きっと今まで続けて来ることはできなかったと思います。他にも、いつも優しく面白く教えてくれる先生など、周りのたくさんの方の支えがあることを、忘れてはいけません。



東日本大震災警察官救護記録

「あなたへ。」を読んで

大根布小学校 六年 菊井 琴美

私は、夏休みに入ってお父さんから一冊の本を借りました。約10年前、私が一才三ヶ月の時に、東日本大震災というとても大きな震災がありました。その時に、全国からはけんされたたくさんの方の警察官がいます。その方々の手記を、一冊にまとめた本がこの本です。最初は、この本を読むのはとてもこわくていやでした。なぜかというと、6月に、静岡県熱海市で大雨による土石流で大きな被害をうけているニュースを、たくさん見て、とてもこわかったからです。この東日本大震災の時には、小学校も津波の被害にあい、たくさんの方

徒が亡ってしまっただけです。だから私は、10年前の出来事だから知らない、関係ないではなく、その日の出来事や災害にあった人、救助にあたった人達の事を知りたい、知らないといけないと思い、この本を読むことに決めました。

私が、印象に残っている手記が2つあります。一つは、宮城県警の警察官の、手記です。小学4年生の男の子が、もうすぐ新一年生になるはずの妹と、津波に巻き込まれました。男の子は助かったけど、妹は亡くなってしまいました。「助けてあげられなくてごめんね。」と妹に向かって手を合わせ、そこにいたおまわりさんに「妹を見つけてくれてありがとう。」と言った男の子の言葉が、とても心に残りました。津波に巻き込まれて、とても恐ろしかったと思います。妹を失ってとても悲しかったし、とてもくやしかったと思います。でも男の子はその気持ちをぐっとこらえて、おまわ

りさんにありがとうと伝えたのです。

二つ目は、千葉県警の女性警察官の手記です。

被害にあった男性の、奥さんと娘さんは男性が仕事場から帰ってくるのを待ち続けたため、津波の被害にあって亡くなってしまいました。発見された車の中から、避難道具と男性の着がえが出てきたので、帰りを待っていたことが分ったそうです。

男性は、おまわりさんに「あんたに話せたからぶん切りついた。いつまでも泣いてらんねえな。福島からあんたのことを娘だと思って見守っているからな、がんばれ。」と話されたそうです。辛い思いの中でもおまわりさんに、応援の言葉をかける男性に心を打たれました。

私は、この本を読んで災害の恐しさを知ることが出来ました。災害が起きた時、どのような行動をとればいいのかふだんから考えることが大切だと感じました。学校の避難訓練も、大きな意味が

あるので、先生の話をしっかり聞いてまじめにとりくむことが大切なんだと思いました。私のお父さんは警察官です。普段どのような仕事をしているかなんとなくしかわかりませんが、地域の人達のくらしを守りながら心によりそう大切な仕事をしていると知ることが出来ました。私は今、家族といっしょに生活出来る事、友達がいて元気に遊べる事、学校でみんなと勉強出来る事が、とても幸せな事だと思いました。これから私は一日一日を大切にしたいです。



孤独であること

内灘中学校 二年 吉田 紗久

私は本を読むのが好きだ。これまでいろいろな本を読んできた。そんな私が、本を選んでいたときにある題名の本に惹かれた。それが「ひと」という本だ。日常生活でもよく使われている言葉だが、私はすごく気になった。だからこの本を選んだ。

この「ひと」という本の主人公は柏木聖輔というひとりの人だ。聖輔は二十歳にして父も母も失い、孤独であった。そんな彼が砂町銀座の商店街

の一角にある「おかずの田野倉」で働き始め、段々と自分の行く先を定めていく、というひとりの人生の物語だ。

聖輔の父は自動車を運転している途中に飛び出してきた猫をよけようとして事故を起こして死んでしまった。それを知った聖輔は悲しむのではなく、衝撃を受ける。私は身の周りの人が亡くなったりした経験はないから、もしそうになったらどうすればよいか分からない。でも私も驚いてしまうような気がする。聖輔はその事故のせいで猫が苦手になってしまった。私もそんな経験があるから聖輔の気持ちがよくよく分かった。猫が悪い訳でもないが、なにかのせいにしてしまいたくなっただんだと思う。そして、聖輔は母までもを失って

しまった。二十歳という若い年で、自分と一番近い存在を失ってしまったのだ。これがまさに「孤独」というものなんだろうな、と私は思った。

「孤独」というものは本当に怖いものなのではないか、と私は考える。なぜなら、誰にも頼ることができず、誰にも必要とされない、そんなものだからだ。だからこそ、聖輔が「おかずの田野倉」に出会ったのは奇跡なのではないかと思う。でも、ただの奇跡ではない。その店で残り一つだったコロッケを、聖輔は見知らぬお婆さんに譲ったことから始まったからだ。私なら、やっぱり欲しいと思ったものは誰かを差し置いてでも欲しいと思ってしまう。それを聖輔はすぐに譲った。そういう小さなことが、聖輔とおかずの田野倉との奇跡に

つながったのだと思う。この他にも、聖輔は、すれ違うひとに道を譲ったことで、高校のころの同級生に再会する。こういう場合、奇跡が起きた、というより、聖輔が自分で奇跡を呼んだ、というほうが正解な気がする。聖輔の小さな優しさ、心づかいが知らぬ間に奇跡を呼んだのだろう。聖輔は本当に実直な人間だと思う。そして、身の周りの人がそうであれば付き合いも長く続くだろう。また、自分もそうでありたいと思う。聖輔のように実直なひとばかりなら社会は平和だ。しかし現実には「我先に」となることも多い。誰にでも欲望があつて、その強さが異なるだけ。ただ、強すぎる人は聖輔のような人からあらゆるものを奪い取って、勝ち抜けようとするだろう。「勝ち抜けよ

う」と書いたが、人生に勝ち負けというものがあ
るのだろうか。よく聞く「勝ち組」「負け組」と
は何だろう。

裕福な家で育ち、十分な教育を受け、進学し就
職する、という順風満帆な人生を「勝ち組」と呼
ぶなら、両親を失い、大学を辞めた聖輔は「負け
組」かもしれない。持てる者は最初から勝ち抜け
る可能性が高い。この本の中でいうなら高瀬涼は
「勝ち組」だ。聖輔の高校の同級生、青葉いわく
「頭が良くて悪い人でもない」。

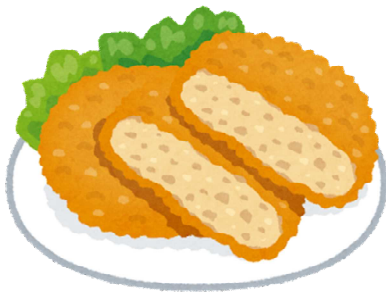
でも、本当に人生に勝ち負けなんてあるのだろ
うか。幸せそうに見える人が必ずしも幸せだとは
限らないし、持たざる者が不幸せと決めつけるの
も早計すぎる。世間的に見れば聖輔は不幸な身の

上と見られるだろう。自分に降りかかった現実を
受けとめて、限られた選択肢から将来を決めてい
る。しかし聖輔は選択肢が少ないことすら嘆かな
い。言い方を変えれば聖輔は与えられた環境で生
きている。こういう心境になれたら「奪う」「勝
ち抜く」という考えはなくなりそうだ。生きるこ
う。人生はいつ終わるか分からない。それを両
親の死をもって知った聖輔は自分の人生を自分な
りに全うしようとしているのだろう。

聖輔は不幸せなできごとによって「孤独」にな
ったが、似たようなことは誰の人生にも起こりう
る。好きだった猫も、苦手になってしまいかもし
れない。でも聖輔は現実を受けとめ前を向いたこ

とで猫をかわいいと思えた。

実直な聖輔を見ていると、「こうありたい」と思う。でもそうなれる自信はない。私はこの本を読んで、孤独は怖いもの、という考えが少し変わった。孤独は人生において本当に大切なものを浮かび上がらせる。孤独は自分に問いかけ、孤独を深める。独りだから、そばにいるひとがいるありがたさを知る。だから私は、孤独でありたい。



大人から見た子供、子供から見た大人

内灘中学校 二年 森 響生

僕は、小学校の高学年の頃からあるシリーズの小説を読むことに没頭していた。それは、宗田理著「ぼくらシリーズ」である。このシリーズの中で、特に心に残った一冊がある。

本シリーズの第一作、「ぼくらの七日間戦争」である。夏休み前日、東京下町の中学校一年二組の男子生徒全員が忽然と姿を消す。街の大人がパニックになる中、親や教師のすることに不満や理不尽な思いを募らせていた彼らは、彼らの親や教師が経験した全共闘運動（東大、日大を中心とする全国の学生による権力との闘争）のように街中の廃墟に立て籠り、大人に戦争を挑むのである。

主人公、菊地英治含め個性豊かな仲間が繰り広げる、大人との闘いの痛快な面白さが印象深い一冊だと僕は思う。

僕は、この本を読むまでは、大人の言うことは必ず従い、否定することは殆ど無かった。大人は僕よりも経験があるし、大人は間違えないと思っていたからだ。また、逆らうのが恐かったからでもある。僕は、ただ大人に従順な子供だった。しかし彼らは大人に言いたいことが言える程解放されていて、大人に正面からぶつかっていけるほど、一人の人間として成長していた。僕は「自分も従ってばかりの子供では駄目だ。自立して、自分の考えを持たなくてはいけないんだ。」という考え方をするようになった。主人公の英治は僕と似た考え方の変化をしていた。解放区（彼らが立て籠もった廃墟）へ行くまでは、大人に言いたいことはあるが、子供だから仕方無いと諦めていた。

しかし、皆の勢いに追いつけず臆病になりながらも、最後には英治本来の、明るく解放的な人間性を取り戻すことができ、良かったと思った。

しかし、僕がもしクラスメイトだったら、きっと解放区へは行かないだろう。理由はいくつかある。まず、彼らのやったことは犯罪だからだ。将来に影響が出ると思う。さらに、周りの目が恐いからだ。少し卑怯で、言っていることと矛盾しているとも思うが、現実を見るのは大切だと思う。そして、最も大きな理由は、家族の信用を失うからだ。子供を、ただ大人に従順にしたがる親は好きでは無い。小説の中ではそういう親や悪い大人が多く登場する。僕の周りにそんな人はいないと思う。例えば僕の親は、僕が自分で物事を決める権利をくれる存在である。

そんな僕の予想だが、解放区に行かない人が一人はいると思っていた。ところが、全員来たので

ある。とても驚いた。なぜなら、その中には、いわゆる「ガリ勉」な人や、気が小さく大人に刃向かえそうにない人もいたからだ。英治と、親友で解放区をつくることを計画したもう一人の主人公、相原徹自身も、信じられないと感じていた。ここで、相原が彼らに放った言葉が心に残っている。

「この中に無理して参加しているのがいたら、やめてもらってもいいんだぜ。それだからって、おれたちは仲間はずれには絶対しねえから」
相原は、僕と同じような人がいて、気を使ったり、仲間外れを恐れて参加していると考えたのだろう。彼の、仲間への思いやりを感じた。そして、さらに心に残ったのはこの後だ。

「無理なんかしてねえよ。やりてえからやるんだ」と言葉を一人一人が返しているのだ。全員が団結した瞬間だと思い、僕は感動した。なぜ彼らが、ここまで団結できたのか。それは、大人に対する

考えが一致したからだ。作中、「大人のミニチュア」という言葉が何度か登場する。彼らは、子供は大人のミニチュアなんかでは無い、ということをお訴えたかったのでは無いだろうか。大人のミニチュアというのは、大人の理想の子供像であり、大人や社会に従順な子供のことだと思う。彼らの周りの大人がその考えに至るのは、子供に幸せになって欲しいと願うからだ。だがそれがかえって彼らには束縛になってしまった。彼らは決して大人が嫌いな訳では無い。子供から見た大人、子供から見た社会とはどんなものなのか、ということをお考えて欲しかったのだ。そして僕も同感だ。

この本を読み、作中の大人を見て、大人は子供とは社会に対する目線が異なるのだということ、そして大人も間違えることがあるということを知った。僕の考えは、初めは大人が絶対だった。しかし、自分自身で物事を考えることが重要だと気が

付き、大人に束縛されずに成長していきたいと思った。そのためには、彼らまでの行動力は無くとも、大人を優先し過ぎず自分の心の声を解放することを大切にしていきたい。



考び、繋ぐ

内灘中学校 三年 橋本 瀬七

なぜ戦争はとめられなかったのか。反対したら殺されるからか、戦うことが当たり前だと思っていたからか。それとも負けた後がどれほど辛い状況になるのか分かっていなかったからか。当時の人がどのような思いで爆弾から逃げていたのかは分からない。分かっている事はたくさんの人が涙を流し、恐ろしい程の命がなくなったという事だ。

終戦から七十六年経った二〇二一年の今。今まで戦争の話が伝えられてきたのはなぜか。この本を読む前は戦争についてあまり深く考える事ができていなかった。授業で習い、夏になるとテレビ番組で話を聞くだけだった。もともと戦争の話が

苦手だった。聞いているだけで心が苦しくなり戦争の話から逃げていた部分があった。そこでこの本を読んで少しでも戦争に向き合おうと思い私はこの本を選んだ。

中学二年生の百合は、親や学校、日々の全てに苛々していた。そんなある日、百合は母親と喧嘩をして家を飛び出した。野宿をするために防空壕のなかに入り一晚をすごす。目が覚めると七十年前の戦事中の日本だった。そこで百合は偶然通りかかった彰に助けられ「鶴屋食堂」に住みこみで働き始める。食堂の近くに陸軍の飛行場があり特攻隊である彰はよく仲間達と一緒に食堂に来る。彰は自分が特攻隊である事に誇りをもち日本が少しでも勝つ方向に進めるように自分の命を捨てる覚悟をしていた。百合は彰の誠実さと優しさに惹かれていった。最後まで百合は彰が命を懸けることに反対したが、彰は南の空へ飛び立った。最後

に彰からの手紙を読めないまま現代にもどってきた百合は人が変わったように素直な性格になった。当たり前のような日常が戻り社会科見学で「特攻資料館」に向かうことになった。遺書、という書き出しでおかれた手紙のなかに彰の字で「百合へ」とかかれた手紙を見つける。内容を読んだ百合は彰の本当の想いを知り、泣かずにはいられない。

「たしかに、俺じゃないといけない理由はない」この言葉は百合が、なんで彰が死ななければいけないのと言った際に彰がかけた言葉だ。私はこの文を読んでどうしてここまで日本のために死ぬ覚悟ができるのだろうと疑問に思った。彰はまだ二十歳で早稲田大学の学生だった。哲学の研究をしていた学生で、普通の学生だ。たくさんいる日本国民の一人に過ぎない。なのに、なぜ生まれて育った国のために家族を残して先に死ぬ覚悟ができるのだろうか。絶対に帰ってこれない事が分っ

ていても逃げずに笑顔で過ごせる事ができるのだろうか。百合には分からなかった。今の私も理解することはできない。六年後には分かるのだろうか。国のために命を懸けることができるのだろうか。

彰とその仲間達に出撃命令が出たのは出撃する三日前だった。その日の夜、彰の仲間である板倉が消えた。逃げたのだ。板倉は百合に見つけられた。板倉は百合に土下座をして願った。両親が死んで体の不自由な彼女が居るから俺は死ねない。帰らせてくれ。仲間の加藤が詰め寄り怒った。板倉はなぜ生きてはいけない、俺たちが何をしたというのだ怒りを滲ませた声で叫んだ。私も板倉の意見がもつともだと思った。生きて帰ることが恥なわけがない。悪事を働いたわけでもないのに国のために命を落せる理由はどこにもない。しかし私が板倉だったら、特攻隊の仲間が死んでいつ

いるのに今まで通りに生活を送ることは無理だろう。少し胸に痛みができると思う。

百合は戦争に非難したら非国民と呼ばれる時代でも非難し続けた。特攻隊の彰にどうせ日本は負けると言った。私だったら、その時代で非難してはいけない事だと分かっているから何も言えないだろう。その時代に流されていってしまう。しかし百合は最後まで「おかしい」と言い続けた。私は百合の真っすぐな性格が素晴らしいと思った。周りが何と言おうと間違っている事は間違っていると言いはることは大変だと思う。

なぜ戦争はとめられなかったのか。私にはまだ分からない。国民が反対し続けたら、政府が冷静になって考えれば良かったのか。正しい事は分からない。しかし、一度あった事で今の私達は同じことを繰り返さないという意識が持てているし、平和主義も成り立っている事も事実だ。この本を

読んで戦争に対する意識が高まった。これから戦争という話から逃げずにたくさんの事を調べていこうと思う。知識を増やして、私達が次の世代へと受け継いでいく。絶対に忘れてはいけない事だ。戦争への意識がうすまることのないように考
えることを辞めてはいけない。



人間性も野球も”日本一“

内灘中学校 三年 南 梓彩

私はソフトボール部に所属していた。しかし、六月の大会で惜しくも敗れ、上位大会に行けず引退となった。この本を読みながら、入部してから今までの約三年間を思い出していた。後悔することや反省すること、そして次に活かしていきたいと思うことがたくさん見つかった。

「何か我慢することがないと日本一にはなれないよ」これは、私がこの本を読んで一番心に残った言葉だ。私は部活動をしてきた三年間、スマホやテレビを我慢して素振りやストレッチにあてることができていなかった。目標を達成するために、それくらいの覚悟を持って徹底して取り組ま

なければいけなかったんだととても後悔した。また、この本で「野球小僧」という言葉が出てくる。ヒマさえあれば、バットを振っていたり、グローブやボールを握っていたりするほど野球に夢中な子のことだ。私はヒマだったら、グローブやボールではなく、スマホを持ってダラダラしてしまっていた。素振りも決めた回数振るだけでそれ以上振ることはあまりなかった。だから、最後の大会の大切な場面で打てなかったのかなと、今改めて思った。今さら後悔しても仕方ないことだが、この本を通してやっぱりもっとしておけばよかったと思う。

私は、ソフトボール部でキャプテンをしていた。この本を読んで私のキャプテンとしての姿はどうだったか、振り返って考えてみた。みんなでたくさん話し合っただけでその意見をしっかりと取り入れることはできていたか、目標を達成するために、時に

は厳しく接していたか、チームのみんなと良い信頼関係をつくることができていたか、みんなのお手本になれるくらい自分を追い込んで一生懸命取り組んでいたか、など他にもたくさんあるが、振り返ってみるとできていなかったことが多いと思う。部のリーダーとして不足していた部分に気づき、とても反省している。

また、この本を読み終えた時、私も部活動の顧問の先生に同じようなことを言われていたの思い出した。例えば、道具やグラウンドを大切に使うこと。私は、グローブなどを大切に扱うことや、グラウンド整備を心を込めて行うことは心がけてきた。だから、この本を読んで、今までそうしてきたよかった、と思った。私は小学校では三年生から四年間野球をしていた。その時使っていたグローブがある。最初は父や母に手入れしてもらっていたが、五年生くらいからは自分で手入れは

するようになった。私にとってそのグローブは、大切に使い続けた思い出深い宝物だ。

また、「並べる」「揃える」ということも徹底することを心がけていた。バツグを並べて置く、ランニングの時は足を揃える、など周りから見てもきれいだと感じられる。しかし、「心を一つに」という意味でも重要なことだと、この本を通して改めて感じることもできた。また、部の顧問の先生もこの本にあるように「学生である以上、まず重視しなければならないのは学業」だから、学校生活が一番大事だとよく言われた。しかしこの本から私は、学校生活のなかでの授業態度や掃除、係や委員会の仕事などを、積極的に手を抜かずに取り組むことは「徳を積む」ということだからという意味でも、「学校生活を大事に」と言われていたのだろうかと思った。

また、この本で星稜中学校野球部の生徒が毎日

学校までの道のりでゴミ拾いを行っているというお話がある。私はこのお話を読んで、私だったらきっとできないと同じ中学生として、本当にすごいと感動したし、本当に人間性が優れている人とは、このような行動ができる人なんだと思いました。このようなこと小さなことの日々の積み重ねを「徳を積む」と言っている。これらは日常の中では小さいことだが、とても大変なことだと思う。このような小さなことに気を使い、続けていけるような人になりたいと思う。

私は、部活動そしてこの本を通して人間として大切なことを学ぶことができた。あいさつや掃除などを積極的に手を抜かず行うこと、人に感謝すること、目標を達成するために努力することなどたくさんのことだ。また、部活動で味わった悔しい思いを次に活かしていきたいと思う。まず、今まで部活動を支え、たくさんの経験をさせてくだ

さった、顧問の先生、家族、仲間など多くの人に感謝したい。また、学校生活でも積極的に行動していきたい。数か月後には受験がある。だからスマホやテレビを我慢し、勉強時間にする。そして、高校生、大人になるに向けて人のために行動できるように立派な人間になりたい。



令和三年度 内灘町子ども読書感想文コンクール 入賞作品一覧

【小学生の部 優秀賞】

みずをくむプリンセスをよんで

大根布小学校 一年

高山^{たかやま} 瑚子^{ここ}

「どこからきたの？おべんとう」をよんで

白帆台小学校 一年

清野^{きよの} 恵美里^{えみり}

キンと能里

向粟崎小学校 二年

米田^{よねだ} 光^{ひかる}

「はしごしゃののびるくん」を読んで

白帆台小学校 二年

山田^{やまだ} 陽翔^{はると}

やさしいメロスと親友

向粟崎小学校 三年

中谷^{なかに} 芽衣^{めい}

おにぼうを読んで

鶴ヶ丘小学校 三年

谷場^{たにば} 奏風^{かなた}

ふしぎながしや

向粟崎小学校 四年

夷藤^{いとう} 彩音^{あやね}

いなかぐらしの2人

清湖小学校 四年

吉田^{よしだ} 昊矢^{こうや}

努力について教えられる本

清湖小学校 五年

山田^{やまだ} 咲幸^{さゆき}

世界で最初にズボンをはいた女の子

白帆台小学校 五年

横山^{よこやま} 来未^{くるみ}

グッドブックを読んで

向栗崎小学校 六年 犬原 嘉乃

そのときはやくこないかな

白帆台小学校 一年 本谷 梨衣奈

東日本大震災警察官救護記録「あなたへ。」を読んで

大根布小学校 六年 菊井 琴美

ともだち大すき

清湖小学校 二年 青木 應快

【小学生の部 入選】

「うれしいやくそく」をよんで

清湖小学校 一年 中山 航希

大じな友だち

大根布小学校 二年 中田 遥斗

「まほうのじどうはんばいき」をよんで

鶴ヶ丘小学校 一年 清水 由羽奈

まほうのじどうはんばいき

白帆台小学校 二年 松島 優月

「どこからきたのおべんとう」をよんで

大根布小学校 一年 高畠 くるみ

百円のねうち

向栗崎小学校 三年 開口 維吹

「ともだち」を読んで

清湖小学校 三年

森^{もり} 結生^{ゆう}

ひろしまのピカ

白帆台小学校 三年

宮^{みや} 雅貴^{まさき}

「かあちゃんとりあつかいせつ明書」を読んで

白帆台小学校 三年

清野^{きよの} 結人^{ゆいと}

未来のわたし

向栗崎小学校 四年

藤高^{ふじたか} 結衣^{ゆい}

かあちゃん取扱説明書を読んで

清湖小学校 四年

坂市^{さかいち} 彩羽^{いろは}

教室はまちがうところだを読んで

清湖小学校 四年

中井^{なかい} ゆづ香^か

「100グラムのいのち」をよんで

鶴ヶ丘小学校 四年

濱江^{はまえ} 楽音^{がくと}

プラスチックゴミが落ちていて気づいたこと

向栗崎小学校 五年

尾ヶ口^{おがぐち} 紗弥^{さや}

「盲導犬サーブ」

鶴ヶ丘小学校 五年

泉^{いずみ} 瑠花^{るか}

これから大切にしたい事

大根布小学校 五年

出山^{でやま} 陽士^{はると}

こどもSDGs

白帆台小学校 五年

中道^{なかみち} 一瑳^{いっさ}

やるぞ、できるぞ、委員会

向栗崎小学校 六年

飯田^{いいた} 有星^{ゆうせい}

ぼくがスマホについて考えたこと。

清湖小学校 六年

野村 泰誠のむら たいせい

アハメドくんのいのちのリレー

大根布小学校 六年

根布長 玲ねぶちやう れい

「チームふたり」を読んで

白帆台小学校 六年

坂本 凛々子さかもと りんりこ

【中学生の部 優秀賞】

孤独であること

内灘中学校 二年

吉田 紗久
よしだ さく

大人から見た子供、子供から見た大人

内灘中学校 二年

森 響生
もり ひびき

考び、繋ぐ

内灘中学校 三年

橋本 瀬七
はしもと せな

人間性も野球も ”日本一“

内灘中学校 三年

南 梓彩
みなみ あずさ

【中学生の部 入選】

私の青春

内灘中学校 二年

根布長 咲希
ねぶちよう さき

牧野富太郎「日本植物学の父」を読んで

内灘中学校 二年

向井 心彩
むかい みさき

考え方を変えてみると

内灘中学校 二年

武部 日菜子
たけべ ひなこ

大切にしたいこと

内灘中学校 二年

大徳 利一
おおとく りいち

当たり前だと思っていたこと

内灘中学校 三年

永長 未羽
えいなが みう

「命」と「幸せ」

内灘中学校 三年

鬼束 おにつか
花音 かのん

愛にあふれたその瞬間

内灘中学校 三年

吉谷 よしたに
優衣 ゆい

「ウィズ・ユー」を読んで

内灘中学校 三年

氷見山 ひみやま
璃音菜 りおな

編集後記

今年度も町内の小中学校から作品を応募いただき「内灘町子ども読書感想文コンクール」を開催することができました。

児童生徒の皆さんをはじめ、子ども達の「読書活動」を推進されている先生方、読書ボランティアの方々、保護者の皆様方にご協力いただき、ありがとうございました。

今年も、昨年からの新型コロナウイルスの感染拡大により大変な状況でしたが、このような状況の中応募していただいた子ども達に喜びを感じております。

今回も作品集を編集するにあたり、優秀賞に選ばれた作品の全文を掲載しました。子ども達には、友達の作品に触れることによって、自分が本を読んだ時の感動や喜びを思い出してもら

い、今後の読書活動の参考にしてもらえたらと思います。また、先生方や保護者の皆様方には、子ども達の感性の豊かさや、その成長の様子を感じていただきたいと思います。

読書は人間の心の成長にとってとても大切な物です。子ども達が本と出会い、感動を覚え、読む楽しさや知る喜びを体感できるよう、私達学びの風推進協議会は、今後も子ども達の読書活動を、応援、推進していきます。

令和四年二月

内灘町学びの風推進協議会

会長 中新 由紀子

編集者

内灘町学びの風推進協議会

会長 中新 由紀子

副会長 荒木 真由美

委員 橋本 喜美子

河野 由美子

山村 薫

竹村 文子

東度 長司

中村 敏男

浅尾 るり子

島 智一

内灘町教育委員会 教育部 文化スポーツ課

